

『熟語本位英和中辞典』の語法と文法

神 崎 高 明

I はじめに

斎藤秀三郎の名著『熟語本位英和中辞典』（1915）が、刊行百年を機に八木克正関西学院大学名誉教授によって校注が施され、2016年10月に新版として岩波書店から出版された。筆者はその校注を協力するに当たって、『熟語本位英和中辞典』（以降は『斎藤中英和』）を詳しく読む機会を得た。数々の発見があったが、なかでも印象に残ったのは、語法・文法に関する多くの説明が辞書の中に盛り込まれていることであった。当時の英和辞典の中で、語法・文法の情報を『斎藤中英和』ほど、ふんだんに取り入れた辞書はないのではなかろうか。その説明は、本文のそこかしこに散りばめられているが、特に重要な所は、「注意」として取り上げられている。本稿では、『斎藤中英和』の中で扱われている興味深い語法・文法事項を取り上げ、それらが、その後の英語の学習参考書や英和辞典にどのような影響を与えているかを歴史的に考察していく。

II PEG, COD と OED

斎藤秀三郎は英文法に関する多くの本を英文で書いている。その中でも重要な本は4巻本の *Practical English Grammar*（以降は PEG）（1898-99）である。この本の我が国の英文法研究に与えた影響には大きいものがあるが、英文で書かれた千ページを超すこの本が広く一般に知られているとは言い難い。その点、PEG の16年後の1915年に出版された『斎藤中英和』は学生や一般人を対象に日本語で書かれており、その熟語本位の立場から書かれた辞書は発行後20年間で80万部も売れ、この辞書の英語教育界に与えた影響は、計り知れないものがある。さらに、この辞書のなかには、PEG の中で詳しく論じた語法・文法のエッセンスが、必要な訂正を加えた上で、適切な例文とともに簡潔にまとめられている。

『斎藤中英和』の中で述べられている語法・文法に関する情報は、すべて斎藤のオリジナルかというと、そうではない。*The Concise Oxford Dictionary* (COD) は『斎藤中英和』が発行された4年前の1911年に発行されている。大村（1960: 429）の調査によれば、斎藤は『斎藤中英和』の発行前に COD を丹念に読んでいた証拠があるとのことである。確かに、『斎藤中英和』の中には COD と内容が重複している箇所があり、その意味で大

村の主張は正しい。たとえば、be anxious about（心配する）と be anxious to（切望する）の意味の差異は、『斎藤中英和』に載っているが、すでに COD でも同様のことが指摘されている。

さらに、当時、10巻本の OED（現在の *The Oxford English Dictionary* は当時 *A New English Dictionary* として発行された）が、数年に1巻ずつ発行されていた。第1巻（A）は1888年に発行され、1909年には第7巻（P）まで発行されていた。その後、1914年に Sh まで発行している。斎藤は、英和辞典を執筆する時点で、おそらく OED の第7巻までは手に入れており、参考にしたと思われる。

Ⅲ 語法・文法の記述

3.1 the same ~ as (that)

『斎藤中英和』で取り上げられた文法項目は、それ以降の学習参考書や英和辞典にも大きな影響を与えている。まず、the same ~ as (that) の構文から見てみよう。

the same ~ as は同じ種類を意味するが、the same ~ that は同一のものを意味するとして、『斎藤中英和』は以下の例を挙げている。

- (1) I have the same dictionary as you have. (僕は君のと同じ字書を有って居る [sic])
- (2) This is the same watch that I have lost. (失くしたのと同一の時計)

この差異を指摘したのは、斎藤が初めてかということ、そうではない。OED の第1巻 (s.v. As B. 23) は1888年に発行されており、そこにはすでに斎藤が指摘した「同種類」と「同一物」の差異が説明されている。おそらく斎藤は、OED を参考にし、the same ~ as と the same ~ that の差異を、PEG (1898: 98) や『斎藤中英和』(1915) で説明したものと思われる。

斎藤が指摘する the same ~ as と the same ~ that の意味の差異は、その後出版された英語の学習参考書や辞書に受け継がれていくことになる。まず、学習参考書から見ていこう。戦前の学習参考書でよく知られているのは、山崎貞の『新自修英文典』である。山崎貞は斎藤秀三郎が校長をしていた正則英語学校の出身であり、山崎は斎藤の弟子に当たる。『斎藤中英和』をはじめ、斎藤の様々な著作のエッセンスが『新自修英文典』の中に盛り込まれている。この書の初版は『自修英文典』として1913年に発行された。その後、1922年に改訂され『新自修英文典』として再発行された。さらに、戦後1963年に毛利可信による増訂版が発行され、多くの受験生に読まれた。その後、しばらく絶版の状態が続いたが、2008年に研究社より復刻版が出ている。その復刻版 (1963: 132) では次のような例文を使って説明がなされている。

- (3) This is the same watch as I lost. (これは私がなくしたのと同じ型の時計だ)
(4) This is the same watch that I lost. (これは私がなくした時計だ)

この訳文を見ると、山崎貞の『新自修英文典』と『斎藤中英和』の説明とは、ほぼ同じであることが分かる¹⁾。

それ以降、多くの学習参考書は『斎藤中英和』の説明を取り入れている。たとえば、青木・伊藤(1961: 386)は『新自修英文典』とまったく同じ例文(3), (4)を挙げて説明している。また、木村(1960: 158)も下記のように、ほぼ同様の例を挙げている。

- (5) the same watch as I lost (私がなくしたのと同じような時計) — 同種
(6) the same watch that I lost (私がなくしたその時計) — 同一

『斎藤中英和』が指摘した the same ~ as と the same ~ that の意味の差異は、それ以降の英和辞典にも大きな影響を与えている。たとえば、『研究社中英和3』(1971)では、次のような例文を挙げて斎藤と同様の説明している。

- (7) I have the same watch as you have [as yours]. (君と同じ時計を持っている) ((同種))
(8) the same watch that I lost (失くした時計) ((同一))

斎藤の中英和以降、多くの英和辞典は、the same ~ as と the same ~ that に上記のような差異があると指摘してきた。

ただし、この同種と同一の差異は厳密なものではない。『研究社中英和』も第5版(1985)から、「as は同種の時で that は同一の時とされているが、厳密な区別はない」という説明に変わっている。『アンカー2』(1981), 『ジーニアス5』(2014)なども、同様の説明をしている。

学習参考書では、江川(1964: 50)がこの「同一種類」と「同一物」の区別は実際の英語には当てはまらないことを指摘している。また、高梨(1973: 221)も必ずしも厳密に区別できないと言っている。

このように説明が変化したのはなぜだろうか。語法研究が進んだこともあろうが、最も大きいのは Jespersen の影響であるように考えられる。Jespersen (1909-1949) の *A Modern English Grammar* の第3巻 (pp.159-160) で、the same ~ as と the same ~ that の間に厳密な区別はないと指摘しているからである。Jespersen のこの説明に、我が国の英和辞典も従ったものと推測される。

1) 大村(1960: 197)によれば「山崎貞の著作『自修英文典』の如きは英文斎藤文法のそのままの翻訳書の如き観を与える程、斎藤文法の祖述に終始している」とのことである。

3.2 not any と no

『斎藤中英和』(1915)では「“not any”は“no”より語気強し」とある。

- (1) I do not want any money.
- (2) I want no money.

この指摘を受けて、その後に出た学習参考書では not any のほうが no よりも意味が強いと書いてあるものが多い。たとえば、高梨(1970: 46)では、次のように説明されている。

- (3) I have no money. (これがふつう)
- (4) I have not any money. (強意)
- (5) I have not money. (まれ)

学習英文法の参考書である高梨(1970)では、斎藤の説明通り、not any のほうが no より強意、つまり語気が強いと説明している。『研究社中英和3』(1971)では、「have, there [here] is のあとでは《口語》でも通例 no (...) を用い、There isn't any book there./ He hasn't any brothers のように言うのは強意的」と説明している。

この斎藤の not any との差異の説明は正しいのであろうか。最近の辞書を調べてみると、斎藤とはまったく逆のことを書いてある。たとえば、『ユース・プログレッシブ』(2004)では「not...any は no に書き換えられる。no を用いる方が強意的」として、次の例を挙げている。

- (6) She doesn't have any brothers. (彼女には兄弟はいない)
- (7) She has no brothers.

『ジーニアス5』(2014)でも、同様に、「両者は交換できるが、no のほうが否定の意味が強い」と説明している²⁾。

このことは、斎藤の辞書に書いてあることと同様の内容を、当初は無批判に学習参考書や辞書に掲載されることが、第2次世界大戦後のある時期まで続いたことを示している。それほど、斎藤の著作、なかでも英和中辞典の後世に与えた影響は大きかったのである³⁾。

3.3 can と may

2) not any と no の意味的差異に関しては、神崎(1978)を参照されたい。

3) 熟語本位英和中辞典が後世に与えた影響がいかに大きかったかについては、八木(2006)、(2016)に詳しく書かれてある。

can, may, must などいくつかの法助動詞は、根源的法助動詞 (root modal) と認識的法助動詞 (epistemic modal) に分けられることは、現在ではよく知られている。この区別は、Hofmann (1966) に遡ると言われている。学習英文法の参考書である Close (1975: 261) ではこの区別を primary uses と secondary uses として説明している。

『斎藤中英和』では、この区別を第一の意味、第二の意味というように区別している。すなわち、(1) のように意志動詞 (do, try, play) と共起すれば、許可の意味を持ち、(2) のように無意志動詞 (be, succeed, fail) と共起すれば、可能の意味を持つ。

(1) You may try. (試みてもよい)

(2) You may succeed. (成功する事も有る可し)

この辞書に先んじて、彼の著書 PEG, vol.2 (1898: 276-278) でも、斎藤は根源的用法に当たる法動詞を primary meaning、認識的用法に当たる法助動詞を secondary meaning として区別しており、その先進性には驚かされる。

3.4 deep と deeply

副詞として使用される deep と deeply の差異を『斎藤中英和』は、「有形の場合には deep をそのまま用い、応用の意味には deeply を用う」と説明している。斎藤と同時代の『井上英和』(1915)、『入江英和』(1913) には、その説明は見られない。

荒木 (他) (1985) は deep は「即物的な深さ」に用い、deeply は「比喩的な意味」で用いるとしている。『研究社中英和3』(1971) は deeply は「主に比喩的な意味に用いる」、と説明している。『ライトハウス』(1995) では、Bolinger および Ilson 博士の意見として、「具体的、物理的に深くの意味では deep のほうが普通」と紹介している。表現は異なるが、荒木 (他) (1985)、『研究社中英和3』、『ライトハウス』の説明は斎藤の説明とよく似ており、それらは斎藤の説明を下敷きにしているように思える⁴⁾。

3.5 different than と to の用法

『斎藤中英和』は「different to は英国にて普通なれども、避くべし」とはっきり言い切っている。different from と to の用法については、1915年前後の日本の英語学界では話題になっていたようで、井上、入江の英和辞典でも言及されている。『井上英和』では「different from は今日普通に用ひられ、different to は俗に多く用いるも正しからずと云う説あり」と different to の用法を暗に避けたほうがよいように言っている。『入江英和』では「different は次に from を採るを本則とす。然るに英語の俗語にて ~ to あれども宜し

4) 八木 (2016: 8) は、この差異に関する説明は斎藤独自のものであろう、と指摘している。

からず」とある。斎藤、井上、入江の3人とも different to は英国で使用されるが、from を使うべきであるという規範的な立場をとっていることが分かる。なかでも斎藤の言い方ははっきりしており、規範的な立場が鮮明である。

これらの意見を、同じ時期に発行された COD (1911) の意見と比べてみると、その差は歴然としている。COD は「from, to, than のいずれも、過去も現在もしっかりした書き手によって使用されている (*from, to, than, all used by good writers past and present*)」と主張している。COD は different to を避けるべき表現だとは考えておらず、正用法として確立していると考えているようである。

現代英語ではどうであろうか。『ユース・プログレッシブ』では BNC のコーパスを使って頻度を調べている。その結果は、書きことばでは90%が from である。話しことばでは from が50% 以上を占めるが、to も40% ほど使われている。

3.6 except と except for

『斎藤中英和』では、except と except for の差異を、次のような文で説明している。

- (1) He has no clothing *except* a loin-cloth. (禪の外には何も着て居らぬ)
- (2) He is naked *except for* a loin-cloth. (禪を締めて居る丈で丸裸)

(1) のように、打ち消しに続く場合には except が使われ、打ち消しを他の言葉に言い換えれば except for になると、斎藤は言う。

この説明方法を採用しているのは『研究社中英和3』と『アンカー2』である。『アンカー2』では、『斎藤中英和』の例とよく似た例が挙げられている。

- (3) He has nothing on *except* a shirt. (彼はワイシャツしか着ていない)
- (4) He is naked *except for* a shirt. (彼はワイシャツを着ているという点を除けば裸だ)

(3), (4) の例は、『斎藤中英和』の (1), (2) の例を参考に行っていると考えられる。

Swan (2005: 173) は、『斎藤中英和』と同じではないが、『斎藤中英和』を下敷きにしたのかと思われる位、よく似た説明をしている。すなわち、all, any, every, no, everything, anybody, nowhere, nobody, whole などのような全体を表す語の後では except for の for はしばしば省略される、と説明している。

- (5) I've cleaned all the rooms *except* the bathroom. (浴室を除いて全部の部屋を掃除した)
- (6) Nobody came *except* John and Mary. (ジョンとメアリー以外、だれも来なかった)

Swan (2005) 以降に発行された『ジーニアス5』(2014)、『ウィズダム3』(2013) は、Swan の説明を踏襲している。打ち消しの表現の後では *except* が使用されるという観察を、早くも1915年の時点で行っていたという斎藤の慧眼には、驚かざるを得ない。

3.7 foot と feet

foot の複数形は feet であり、six feet high (高さ六尺) というように使う。ところが、形容詞的に用いると six-foot man (六尺男) のように単数形をそのまま使う、と『斎藤中英和』は説明する。形容詞的に用いる時には単数形を使用するという説明は、『斎藤中英和』と同時代の『井上英和』にも『入江英和』にも掲載されていない所を見ると、『斎藤中英和』で初めて言及されたのかもしれない。最近のほとんどの辞書(『研究社中英和7』、『ジーニアス5』、『ユース・プログレッシブ』、『オーレックス2』、『ウィズダム3』)は、形容詞的(前位修飾)用法では、常に単数形を使うという説明がされており、『斎藤中英和』の説明を踏襲している。

3.8 ill と sick

『斎藤中英和』は ill の説明の中で、「米国にてはこの意味(「病気」)で sick を用う(この意味の ill は叙述形容詞として用いるが常なり)」と述べている。米国において病気の意味で sick を使うことは、『入江英和』にも載っているので、当時はすでに米語法の sick の用法は一般に知られていたのであろう。注目すべきは、ill は叙述形容詞として用いるのが常であると言っている点である。すなわち、以下の例に見られるように、ill には共起制限があり、an ill boy とは言えないと斎藤は言っている。

- (1) The boy is ill. (その少年は病気だ)
- (2) a sick boy (病気の少年)

この斎藤の共起制限に関する指摘は、現在の辞書にも引き継がれている。たとえば、『アンカー2』は「この意味の限定用法では(英)(米)とも、a sick person (病人)、the sick (病人たち)、a sick room (病室)とし、ill は用いない」と言っている。ただし、限定用法でまったく ill が用いられないかというと、そうではない。『研究社中英和5』は「mentally [seriously, very] ill people (精神病[重病]の人々)のように副詞を伴う場合は限定的に使えるが、普通は限定的には sick を使う」と言っている。それ以後、『ユース・プログレッシブ』、『ジーニアス5』、『ウィズダム3』は、『研究社中英和5』の説明をほぼ踏襲している。Swan (2005: 241) も(3)の例文のように my ill mother より、my sick mother のほうが普通 (common) と言っている。

- (3) I am looking after my sick mother. (私は病気の母の世話をしている)

3.9 known to と known by

動詞 know を使った受身文では、by を使わず to を使うというのは、学習英文法のなかでもよく知られている文法項目である。『斎藤中英和』では、known to と known by の意味の差異を説明するために次のような例を挙げている。

- (1) The fact is known to everybody. (= everybody knows the fact) (この事実は知らぬものは無い)
 (2) a. A man is known by the company he keeps. (人の善悪はその交わる友を見て知れ)
 b. A tree is known by its fruit. (樹の善悪はその実を見て知れ)

この差異を、斎藤は受身形で to を使用するの、判断基準を表す known by の意味と混同しないがためであると説明している。この斎藤の known to と known by の区別は、その後、多くの学習英文法の参考書や英和辞典にも引き継がれている。たとえば、参考書では高梨 (1970: 443) には (2b) と同じ例文を使って説明がなされている。また、辞書では『アンカー2』は、(1) のような受身形は「動作主を表すのに通例 by ではなく to を用いる」と言っている。

なお、斎藤の挙げた (1)、(2) は正しい文であるが、注意を要するのは、(2) の by 句は動作主ではないという点である。(2a) と (2b) を能動形にすると以下ようになる。

- (3) a. We know a man by the company he keeps.
 b. We know a tree by its fruit.

なお、現代英語では、(1) のように to も用いられるが、実際には、次のように、by も用いられる。

- (4) The fact is known by everybody.

(4) は直接その事実を知っている場合に使われることが多いが、(1) の場合は直接その事実を知らなくても使われる⁵⁾。

5) 『ジーニアス5』、『オーレックス2』には、(1) と (4) の差異についての説明がある。

3.10 形式主語の構文

『斎藤中英和』は、(1a) のような文を合体すると (1b) になると言う。また、(2a) を合体すると (2b) になると言う。

- (1) a. It seems that he is a scholar. (学者らしい)
b. He seems to be a scholar.
- (2) a. It seems that he was rich. (金持ちだったと見える)
b. He seems to have been rich.

つまり、斎藤は (1a), (2a) のような形式主語を持つ複文は (1b), (2b) のような単文に、それぞれ書き換えられるというのである。(1a) から (1b) に、また (2a) から (2b) に書き換えられるという文法現象は、この斎藤の指摘以降、いわゆる受験英語の中で書き換え構文として、しばしば取り上げられることになる (高梨1970: 465)。また、この現象はチョムスキーの変形生成文法の中では、上昇変形 (raising) と言われ、典型的な変形規則の一つとして紹介されることになる。

この斎藤の辞書に先んじて、彼の著書 PEG, vol.2 (1898: 134-135) でも、(1a), (2a) のタイプの文は (1b), (2b) と同義であることが指摘されている。

3.11 完了形

『斎藤中英和』は、(1) は (2) と同義であると言う。

- (1) Three years have passed now since my father died. (父が死んでから三年が経つ)
- (2) It is three years since my father died. (父が死んでから三年になる)

つまり、斎藤は (1) のような完了形は、(2) のように書き換えることが出来ると言っている。この変換は、その後、受験英語でもしばしば取り上げられている (木村1960: 341), (小寺2001: 92)。この辞書に先んじて、斎藤の著書 PEG, vol.2 (1898: 89) でも、(1) のタイプの文は (2) と同義であることが指摘されている。

なお、(2) のような文は、アメリカ英語の略式では、(3) のように言うことも可能である (『ユース・プログレッシブ』)

- (3) It has been three years since he died.

3.12 very と much

very は形容詞や副詞を修飾し、動詞を修飾しない。動詞を修飾する時は much を使用

すると『斎藤中英和』は言う⁶⁾。

(1) I am very fond of it. (大好き)

(2) I like it very much.

ただし、分詞から派生した形容詞は、俗語では much でなく very と共起するとして、次のような例を挙げている。

(3) I was very pleased. (嬉しかった)

(4) I was very delighted. (喜んだ)

(5) I was very surprised. (驚いた)

『入江英和』(1912) は、(3)-(5) のように過去分詞の前では very much というべきで very を使うべきでないと主張している。また、入江は very を用いることは、昔はあったが、今は良くないとも言っている。一方、COD (1911) は (3)-(5) のような用法は、口語 (colloquial) と言っている。斎藤と COD はそれぞれ俗語、口語というようによく似た判断をしているが、だからと言って斎藤が COD を参考にしたとも思えない。なぜなら、COD が出版される前に、斎藤はすでに PEG, vol.3 (1899: 44) において、過去分詞の前で very が使用されることがあることを指摘しているからである。なお、斎藤とほぼ同様の指摘は、『井上英和』(1915) でもなされている。

第二次世界大戦後に出版された英和辞典は、『斎藤中英和』の考え方をほぼ引き継いでいる。たとえば、『研究社中英和』の第5版(1985)までは、「過去分詞が明確な受け身に用いられた場合は (very) much を用いる；しかし口語では、特に感情や心的状態を表す過去分詞は形容詞なみに扱われ、very が用いられる」と説明されていた。ところが、同辞典の第6版(1994)になると、「口語では」という文言が消えている。第6版では、(3)-(5) のような文が口語だけでなく、文語でも使用されるようになったことを反映させた説明文になっている。

3.13 twice larger

『斎藤中英和』では、「倍数の次には “twice larger” のごとく比較級を用いず」とある。すなわち、斎藤は twice の後には as large as を使うのが普通であると、英語学習者に注意を呼びかけている。

6) very と much の差異については、八木 (2016) で詳しく論じられている。

- (1) It is twice as large as a dog. (犬の二倍の大きさ)

この考え方は、その後の参考書や語法辞典にも引き継がれている（江川（1964: 106）、Evans（1957: 514））。最近の辞書では『ジーニアス5』が、次のような例文を挙げ、(3)や(5)のような文は非文法的としている。『ウィズダム3』でも同様の指摘がある。

- (2) This book is twice as large as that one. (この本はあの本の2倍の大きさだ)
(3) *This book is twice larger than that one.
(4) You are twice as strong as I am. (君は私の2倍の力がある)
(5) *You are twice stronger than I am.

実際の英語では、twice larger という表現も見られるが、twice as large as の頻度が圧倒的に高い⁷⁾。斎藤は、学習英文法のレベルでは、twice larger は用いるべきではないと言っているのであるが、この考え方は今も妥当である。

IV おわりに

我が国では英語学習者のために数多くの英和辞典が発行されている。それらの英和辞典の特徴は、語法・文法に関する情報が豊富に盛り込まれている点である。このように、語法・文法の情報が盛り込まれた日本人英語学習者のための英和辞典は明治末期から大正にかけて作られるようになった。代表的な辞典が『入江英和』、『井上英和』、『斎藤中英和』の3つの英和辞典である。これらの英和辞典の中で、『斎藤中英和』ほど、語法・文法の情報を、ふんだんに取り入れた辞書はない。その説明は、本文のそこかしこに散りばめられているが、特に重要な所は、「注意」として取り上げられている。本稿では、『斎藤中英和』の中で扱われている多くの語法・文法事項の中で、13項目を取り上げ検討した。その結果、『斎藤中英和』の中で扱われている語法・文法事項は COD や OED を参考にしている場合もあるが、多くは斎藤独自の考え方であることが明らかになった。『斎藤中英和』が指摘した多くの語法・文法に関する見方は、弟子の山崎貞の『新自修英文典』をはじめとする学習参考書を經由して、戦後に出た多くの学習参考書へと受け継がれてゆく。また、『斎藤中英和』は、その後の英和辞典の原型と言ってよいものであり、戦後に出た多くの英和辞典が『斎藤中英和』を基に作られていることを論じた。

7) BNC や COCA などのコーパスを見ても、twice larger のコロケーションは見つからない。

引用文献

辞書

- 『アンカー2』：柴田徹士（編）『アンカー英和辞典』（第2版）（1981）学習研究社
 『井上英和』：井上十吉『井上英和大辞典』（1915）至誠堂
 『入江英和』：入江祝衛（編）『詳解英和辞典』（1912）博育堂
 『ウィズダム3』：井上永幸・赤野一郎（編）『ウィズダム英和辞典』（第3版）（2013）三省堂
 『オーレックス2』：野村恵造（他）（編）『オーレックス英和辞典』（第2版）（2013）旺文社
 『研究社中英和3』：岩崎民平（他）（編）『新英和中辞典』（第3版）（1971）研究社
 『研究社中英和5』：小稲義男（他）（編）『新英和中辞典』（第5版）（1985）研究社
 『研究社中英和7』：竹林 滋（他）（編）『新英和中辞典』（第7版）（2003）研究社
 『斎藤中英和』：斎藤秀三郎『熟語本位英和中辞典』（1915）日英社
 『ジーニアス2』：小西友七（編）『ジーニアス英和辞典』（第2版）（1994）大修館
 『ジーニアス5』：南出康世（編）『ジーニアス英和辞典』（第5版）（2014）大修館
 『ユース・プログレッシブ』：八木克正（編）『ユース・プログレッシブ英和辞典』（2004）小学館
 『ライトハウス』：竹林 滋（他）（編）『カレッジ・ライトハウス英和辞典』（1995）研究社

COD：Fowler, H. W. and F. G. (1911) *The Concise Oxford Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.
 OED：Murray, J. et al. (eds.) (1888-1928) *The Oxford English Dictionary*. Oxford: Oxford University Press.

著書・論文・語法辞典

- 荒木一雄（他）（編）（1985）『英語表現辞典』研究社
 青木常雄・伊藤健三（1961）『英文法精義』培風館
 江川泰一郎（1964）『英文法解説』金子書房
 大村喜吉（1960）『斎藤秀三郎伝』吾妻書房
 神崎高明（1978）「否定要素編入変形の条件」『英米文学』（関西学院大学）33巻1号，56-71
 木村 明（1960）『英文法精解』培風館
 小寺茂明（2001）『デュアルスコープ総合英語』数研出版
 高梨健吉（1970）『総解英文法』美誠社
 高梨健吉（1973）『高校生の基礎からの英語』美誠社
 八木克正（2006）『英和辞典の研究』開拓社
 八木克正（2016）『斎藤さんの英和中辞典』岩波書店
 山崎 貞（増訂・毛利可信）（1963）『新自修英文典』研究社

Close, R. A. (1975) *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.
 Evans, B. and C. Evans (1957) *A Dictionary of Contemporary American Usage*. New York: Random House.
 Hofmann T. R. (1966) "Past Tense Replacement and the Modal System" Report NSF-17 of the Aiken Computation Laboratory, Harvard University. (J. D. MacCawley (1976) *Syntax and Semantics*. Vo.7. New York: Academic Press. に採録)
 Jespersen, O. (1909-1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7 vols. London:

George Allen & Unwin.

Saito, H. (1898-1899) *Practical English Grammar*. 4 vols. Tokyo: Kobunsha.

Swan, M (2005) *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.

Grammar and Usage in *Saito's Idiomatic English-Japanese Dictionary*

Takaaki KANZAKI

The purpose of this article is twofold. First, an exploration of grammar and usage in Hidesaburo Saito's *Idiomatic English-Japanese Dictionary* (1915) will be undertaken. Second, by examining thirteen topics in grammar and usage utilized in this dictionary, it will be demonstrated how subsequent dictionaries and reference books pertaining to the study of English (e.g. Minamide (2014), Yamasaki (1963)) were influenced.

In commemoration of the 100th anniversary of Saito's (1915) dictionary, which has always been considered a unique Japanese-English dictionary, a newly annotated version of this dictionary was published in 2016. Along with the main annotator, Dr. Katsumasa Yagi, professor emeritus of Kwansei Gakuin University, the author was one of select members to perform annotation work, providing an opportunity to closely examine the dictionary. This close examination revealed a number of interesting findings. Although Saito (1915) introduced and discussed a variety of useful topics, often providing illuminating ideas and detailed explanations on them, the topics were not always his original work. For instance, he sometimes repeated ideas contained in other works such as the *Concise Oxford Dictionary* (1911). Despite this, he is considered to be the first grammarian to highlight and discuss many English grammar and usage topics thought to be difficult for Japanese learners of English.

The grammatical items and their usage introduced by Saito (1915) were subsequently supported by like-minded lexicographers and grammarians, resulting in the spread of his ideas and the publication of various dictionaries and reference books (e.g. Iwasaki (1971), Takanashi (1970)). However, although Saito's (1915) original work has been extremely beneficial, one must be mindful that languages are not static, changing and evolving over time. Accordingly, since much of the data collected and analyzed was based on 19th century English, it often differs from 20th century and current English usage.